てんたん！

鄭文ういな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
てんたん！

【Ｎコード】
Ｎ９８０１Ｘ

【作者名】
鄭文ういな

【あらすじ】
【テンミリオン９周年記念作品】どうしようもなく虚しい冒険を終えて、早くも遅くも七年が経った。帰ってきた彼らに待っていたのは拍手でも報酬でも名誉でもなく、虚勢を張った現実だけだった。彼らは寄り添いあい突っ撥ねあい……そして十月二十八日は訪れた。魔王、あんたは一体どこにいるんだ。（※ｕ１７名義で『テンミリオン』に重複投稿しています）

第〇幕

「あぁぁぁ！」
そんな叫び声が壁を跳ね回った。
女は、目の前の惨事を否定するように、現実に目を背けるように首をふる。女の赤いツインテールが余裕なく揺れる。
「どうしたどうしたっ！？」
どたどたとした足音と、がさがさとした服の擦れる音が近づく。
自動で開く扉から、焦げ茶色のコートを身に着けた金髪の男が飛び出てきた。声の溌剌さとは相反して、眠たそうな顔をしている。
「マゼンダ……どうした」
わなわなと女の肩が震えている。金髪の男は、あまり気遣いのなさそうな声で、その肩に手を置いた。
「ブロント……あ、あれ……」
肩が揺れているせいなのかどうかは分からないが、指も狂ったコンパスの針のように震えていた。その指が、焦点をぶらしながらもそれを差す。
そこには一枚の皿があった。銀色の机の上に、ぽつんとあった。
「あたしの……シュークリームが――」
蒼白な顔を隠さずに、赤い髪の女マゼンダが言う。
「――あたしの作ったおやつがない！」
金切り声をあげてマゼンダが叫ぶ。いちいち壁がそれを跳ね返した。マゼンダの瞳からは、うっすらと涙が溜まっていた。
「おやつがない……だ、と？」
ブロントがはっとした表情で驚く。そして、その表情を笑みにかえ、ブロントはいつもの台詞を壁に放つのであった。
「事件の香りがグッドテイストだぜ！」
こうして、十月二十八日は始まった。

第一幕

この町は、人口は多いが人通りの少ないところだ。六つの高層ビルが円く立ち並び、それらは地上十メートルのあたりから渡り廊下でつながれている。渡り廊下でつながれた六つのビルが、人工的な円を描いている。

「あの、ちょっとだけよろしいですか？」

ふわふわとした金髪が背中まで伸びていて、宝石を埋め込めたような瞳をした少女が、ちょうど渡り廊下ですれ違った男に、そう声をかけた。

「……はい」

少女の美貌に酔いしれた、のかどうかは定かではないが、男は立ち止まった。少女よりもずっと背の高い男である。小動物のような少女は胸ポケットから、リスのような動作で白い紙を取り出す。

「わたくし、こういう者です」

少女が男に渡したのは名刺だった。この閉鎖的な時代にしては、なかなか珍しい代物である。顔に煌く宝石をちらつかせ、少女は軽くお辞儀をする。

「テンミリ探偵事務所、のテミさん？」

男が紙の文字を読み上げる。

「はい。それで、あの、少しお伺いしたいことがあるのですが……」

「なんでしょう」

強い風が吹いた。渡り廊下の窓ガラスが、がたがたと揺れながらも風を受け止める。風が廊下内に入ってくることはない。テミの髪は靡いていた。

「A棟八〇二号室の、朝凪（あさなぎ）さんをご存知ですか」

「ええ。あ」

ふと思い出したように、男は若干腕を持ち上げる。本当にそれはごくわずかなもので、テミはその腕の動きに気付かなかった。

「その人、先月から行方不明になっている人ですよね」
「はい」
どうやら、男は朝凪という人を知っているらしい。男はテミの可憐な顔を見ながら言う。
「僕は、その人の隣に住んでいる者です。八〇一号室の者です」
「あら、そうでしたか。今月の十四日、彼女に……」
テミは、男にあれこれと質問をした。答えを聞きながら、ペンをメモ帳に走らせる。焦げ茶色のカバーを着たメモ帳だ。テミの探偵服と同じ色だ。
「では、こんな朝早くに、お時間をおとりして申し訳ありません。ご協力に感謝します」
そうテミはやわらかくお辞儀をする。惜しげもなく晒される艶やかな金髪が、肩からふわりと垂れた。
頭を上げ、最後ににこやかな表情を見せ、テミは廊下を渡りきるためか男に背を向ける。そうしてゆっくりと歩こうとした。
が、「待て」という背中に刺さる声に、テミは足を捕らえられでもしたように止まる。
おそるおそるもう一度振り返ってみると、それはさきほどの男ではなかった。
「お、お兄様」
黒と白の混ざった色、つまり灰色の髪をしている。右はルビー、左はサファイア。そう喩えられそうな瞳が、同調して冷酷にテミを見る。
「また騙されたな。そんなので探偵が務まると思うのか」
「……」
テミが頭をすくっと下ろし、目を伏せる。まるで親に叱られている子供だ。
「ここは無風の空間なのに、髪が靡いたりして、おかしいとは思わなかったのか？　ヒントのつもりだったのだが」
「……すいません」

消え入るような声だ。それでも芯の通った声だ。またミスをした、そう自分を恥じているというよりも、今のこの状況を鬱陶しく思ってでもいるような声だ。

「さあ、帰るぞ」

「はい」

自分たちの住むところへと、自分の仕事場へと、ふたりは向かう。

ふいに、忘れ物でもしたように彼は立ち止まった。彼の赤と青のオッドアイは、宝石といえど光を失った、埃を被ったような感じを受ける。

「それと」

「……はい？」

「八〇一号室、今は空き部屋だ」

それだけ言って、彼はいつものように黒猫に変化して、先にテンミリ探偵事務所へ行ってしまった。猫のように、無責任に妹を置いて。

廊下の窓を風が叩いた。風が漏れ込んでくることはない。テミの金髪は、銅像のように固まっていた。

第二幕

銅で出来た剣を握っていた。柄のほうではなく、鋭い刃のほうを。それは意外にも痛くはなかった。ただ紅い血が、蛇のように剣に巻きつくばかりである。

頭を弓で挟まれていた。端から見てそれは滑稽な様だったが、しだいに弦は首を絞めつけていった。深く、深く。

足元では毛虫が蠢いている。両足はすでに腫れ、潰れ、腐っていった。

毛虫はだんだん増えていく。山積みに、毛虫が胴体へと顔へと近づいていく。毛虫の山。人を軸とした、毛虫の山。

毛虫が顔に到達するまえに、目の前に青年が現れた。青い髪だ。すらっとした顔立ちと、それに見合った鋭い目つき。青年はまさに今、毛虫の山に埋もれている人の頭に、弓矢を向けていた。

すぐに気付いた。その青年は――昔の自分だ。

青年が矢を放った。

「はっ！」

ブルースは飛び起きた。何か悪い夢でも見ていたようで、体中感じのよくない汗をかいている。けたたましく目覚まし時計が笑っていた。まるで壊れたテープレコーダーのように、けたけたと。

「ブルース？」

リンが、布団から顔を出して、上半身を起こしたブルースを見つめる。

笑いつかれたのか、時計は静かになった。朝の六時半だ。

「どうせ夢だ……」

そう小さく呟いて、ブルースはまたベッドに上半身を倒した。布団の中で、なにも身に着けていないリンを抱きしめる。

「うち、もう道場へ行かな」

そう冷たくも温かくもない口調で、リンは言った。パーマのかか

った黒髪が、白い布団から覗かせている。いともたやすく、リンはブルースの腕をすり抜ける。
リンはC棟の一階にある道場で、総合格闘技を指南している。冒険から帰ってきてから、親の意志を受け継いだのだ。
ブルースはというと、作家をしている。冒険から帰ってきて、その経験をもとにした小説を、いくつも手がけているのだ。
リンが服を着ている間、ブルースは夢のことを考えていた。銅の剣と、首に食い込んでいく弓と、毛虫の山。それと過去の――冒険をしていたころの――自分。恐ろしい夢だ。自分が自分に向かって、まるで敵を射抜くように……。
「んじゃ、いってくるね」
「ああ、いってらっしゃい」
清楚なチャイナドレスを身にまとい、リンはふたりの家を出ていく。
ブルースはシャワールームへと向かった。
またけたたと時計が嘲笑しだした。アラーム設定をまだオフにしていなかったのだ。
ブルースは無視して、ドアノブに手をかけた。

第三幕

魔王なんていなかった。魔王は、人々が創りだした幻だった。低迷していく社会の責任転嫁だった。ただの充て付けだった。

十人の子供たちが冒険で得た成果は、たったのこれだけだった。罪のない獣たちを見境なく殺していただけだった。実際には存在しない魔王を討伐しようと、幻惑の罠に自分からかかっていっただけだった。

誰から始まったわけでもなく、幻の悪者は生まれていた。口で言い伝わっていった童話のように、それは一斉に広まっていった。「悪いのは魔王だ」、「みんな魔王のせいだ」……自分たちの不平を、ありもしない幻想に押し付けた。

次第にみんな、魔王の存在を信じきってしまっていた。自己暗示のように、集団暗示のように。憎悪の矛先が魔王に向けられた。高校を卒業したばかりの十人が、魔王討伐軍として選ばれた。彼らは多くの人から栄光と激励の拍手をもらい、治安の悪い町から旅立っていった。

あまりに多くの獣を殺し、あまりに多くの命を奪った。彼らが最終的にたどり着いた城は、ただの寂れた廃墟だった。獣がねぐらに借りているだけの、無人の城だった。魔王はいなかった。だが彼らは魔王の存在を信じ続けた。城にいる獣をまた殺し、城を炎で包んだ。

魔王なんていなかった。流行はあくまで流行であるように、魔王の存在はだんだん人々の頭から消えていった。忘れ去られていった。そこに残ったのは、皮肉にも社会の発展だった。十人の子供は「ありもしないものを追い続けた頭のおかしな子供たち」として、哀れな眼差しを向けられた。それでも彼らは魔王の存在を信じ続けていた。魔王がいないということは、すなわち彼らは無駄に時間を浪費し、無駄に命を奪い、無駄に命の危険に首を突っ込んでいたという

ことになる。彼らは精神的な治療を受けさせられた。
それから七年が経った。十人の子供は、もう子供ではなくなっていた。
町にはAからFの番号のついた高層ビルが建てられた。住民の九割以上がそこに住み着いた。十人もそこに住んでいた。だが彼らは職にありつけなかった。履歴書の空白と、精神病を患っていたという事実は、剣よりも痛々しく彼らを切り刻んでいた。
ジルバは渡り廊下の窓を拭いていた。外側から、である。廊下の窓は完全に隙間のないように設計させているので、内側から外側を拭くということができないのだ。地上十メートルで、命綱を頼りに窓を拭く。
朝の七時だ。ジルバは六時からこの仕事をしている。彼の役割はA棟とB棟間の渡り廊下。ちなみに、清掃員は渡り廊下しか掃除しない。プライバシーを優先しているのだ。自分の部屋周辺は自分で。
ジルバはもともと、保育士を目指していた。正座をして、まだなにも知らない幼児に未来を教えてあげるのが、ジルバの夢だった。だが百を越える命を奪った男には、低賃金の清掃員しか職は残されていなかった。
ぼりぼりと、ジルバがぼさぼさした茶髪を？いていた。右手でモップを支えながらの行為である。それと、大きな欠伸もひとつ。
彼の髪が茶色いのは、生まれたときから、つまり、地毛である。今彼には、髪を染めるような金はない。
仕事を終えた彼は、のっそりとロープを伝い、屋上へと戻っていく。実はこのとき、命綱とロープは、彼を支える二本の綱は、屋上のコンクリートに擦られて、今にもちぎれそうな状況だった。ジルバはロープを登る。強い風が吹いた。
そして安い綱はちぎれた。

第四幕

黒猫がドアを引っ掻いていた。
ここはD棟の、九一一号室である。職場であるこの部屋は、一般の部屋よりも大きい。
ドアには『テンミリ探偵事務所』とカラフルなペンキで書かれた板が打ち付けられている。
猫が人を呼ぶように鳴く。猫の目は、赤と青のオッドアイになっていた。
そうしているとドアが開いた。「いらっしゃいませー！」という妙に透き通った声とともに。
「なんだ……クロウじゃない」
黒猫を見ると、彼女の声は毒を盛ったようなものになった。自分の赤いツインテールを手で払う。
「全く……猫の姿でドアノブに手が届かないのなら、一旦人間に戻るなりしてよね。こっちは事件抱えて忙しいんだから」
黒猫は行儀よくお座りしている。エサでも欲しているようだ。
「ちょっと、何か言いなさいよね。って、猫は言葉話せないか……」
ばたん。赤い髪の女、マゼンダは、黒猫を中に入れることなくドアを閉めた。目の前でドアを勢いよく閉められたのと、なぜか中に入れてもらえなかったという両方が驚きとなって、猫の毛が逆立つ。尻尾がぴん、と立っていた。
黒猫を紫色の光が取り巻く。次の瞬間にはテミに「お兄様」と呼ばれていた、灰色の髪をした男になっていた。
「おい！　マゼンダ！」
彼はドアを叩く。
「開けてくれ！　俺が悪かったから！」
男らしい声色だった。格別低いというわけではないが、低くないというわけでもない声だ。

右眼は赤く、左眼は青い。感情が眼にでる性格のようで、ふたつの瞳は色は違えど、同じように細くなっていた。まるで猫の眼のように。

「猫は気ままで、悩みなんてどうでもよくなれるんだ。一種の麻薬さ。癖になる。いや、だからどうというわけではないが、俺が悪かった！　どうかドアを開けてくれ」

とうに乾いているペンキを、灰色髪の男クロウは叩く。懇願を込めているようだ。オッドアイが浅く光る。

「……鍵、閉めてないんだけど」

クロウは黒猫に変化した。

第五幕

テミは広間にいた。円形に並んだA棟からF棟までのビルに囲まれた空間のことである。

ベンチに腰掛け、自分よりも遙かに高いビルを眺めていた。「はあ」という溜息もひとつ。

広間には芝生が生えている。だが別段、芝生が珍しいということはない。芝生の生えている部屋は少なからずある。テミは、人工の芝生を、力なく蹴った。

「この草も、あの木も、ぜんぶぜんぶ偽物の命……」

テミを囲う六棟のビルが、無機質に、規則正しく佇んでいた。テミのいる空間は、高度が低いからといって、空気が濃くなっているというわけではない。どれほど高いところでも、ビルの中であれば、完璧な空気調整によって濃度は一律に保たれている。木が葉をゆさゆさ揺らしていた。だが、ここに風はない。それも人工的なものだった。

なにもかも、人工的な、計算しつくされた空間。六十度ずつのズレを意図的に作り、円形に並べられたビル。それらのビルに囲まれた、閉鎖的な広間。閉じた世界。

「うわぁぁぁ！」

テミの上空から、ふいにそんな叫び声が響いた。慌てることなく、テミは声のほうを見上げる。これも人工のものなのだろうか、とでも言うように。

人が落下していた。

「また自殺……馬鹿な人たち」

テミはそう呟く。ベンチに腰を下ろしたまま、何もせずにただ、落ちてくる人を眺める。

その人は、地を背中にして落ちてきていた。自殺するつもりで落下したのなら、背は空を向いていそうなものだが。どうせ、ビルが

高いから落下途中で向きが変わっただけに過ぎないのかもしれないが。
そして人は地についた。
「……」
反重力装置。ビル周辺のいたるところに埋め込まれている機械だ。ある一定以上の速度で地面に落下してくる物体があれば、その物体にマイナスの圧力をかけ、衝撃を緩和し、物体の破損を防ぐ装置だ。
その人は、丈夫にも気絶していなかった。「うぅ」とうめき声を漏らしながらも、起き上がる。
「あ、ジルバさん」
その人は、さきほどまで窓拭きをしていたジルバだった。
テミはベンチから腰を上げる。スカートに皺ができていた。

第六幕

黒猫は籠のなかで眠っていた。仮眠、もとい昼寝とやらである。昼寝というにはいささか早過ぎるが。

クロウは黒猫の姿になるのを気に入っている。最近は本来の姿であるときよりも、黒猫になっている時間のほうが長いほどだ。

そんな安眠に、急に大きな妨害が入ることになった。

「違うもぉぉぉおおおん！」

見た目中学生の成人女性が、テンミリ探偵事務所の応接間に入ってきた。薄緑の散切り頭が妖精のように跳ね回る。黒猫は飛び起きた。

マゼンダも乱入してくる。

「ティンク！　あんたでしょお！　隠したって分かってるんだから！」

マゼンダは白い皿を一枚もっていた。少し砂糖が付着しているように見える。もとは何か、載せてあったようだ。

「違うもん！」

「おいおいどうしたというんだ」

クロウが黒猫の姿のままそう言った。

「シュークリームを食べたのはティンクだったのよ……って、クロウ！　あんた猫のままでも話せたの！？」

「あっ、今の無し――」

「お菓子食べたのわたしじゃないもん！」

と、収集のつかない様子である。

「ふぁあ。なんの用だ～？」

応接間のソファーで眠っていたブロントが、やっと騒ぎに気付いて起きた。早朝にマゼンダの叫び声で起こされているので、睡眠時間が不足しているらしい。

「はやく返してよ！　あたしが作ったシュークリーム！」

ブロントを無視して、マゼンダはティンクを問いただす。
「ほんとにっ！　違うんだもぉぉん！」
そう言ってティンクは探偵事務所を出て行った。
「またリンのとこに行ったのか」
ブロントが寝ぼけながらも、ティンクの後姿を目で追ってそう言う。
「あの合法ロリめ……帰ってきたらタダじゃおかないんだから！」

第七幕

ティンクは道場に着いた。

そこは今日も覇気のある声や、ミットを打ちつける音や、軽やかなフットワークの鈍い音で充満していた。

ここはリンが指南を担っている（リンだけが指南役というわけではない）総合格闘技の道場である。

「リン～」

ティンクは、なにか困ったことがあったときや悩んでいるときなどは、ここに来ている。ここのリン――同じ高校を卒業し、共に冒険に出た友達――に慰めてもらったり、アドバイスを貰ったり……親に叱られて祖母のところへと逃げていく孫のように、ティンクはリンに会いにくるのだ。

「あ、ティンクちゃんお久～」

リンの指南を受けている女子が、ティンクにそう声をかけた。まだ未成年の子だが、ティンクよりも年上であるように見える。いやそれはもちろん、ティンクの容姿のほうに問題があるのだが。

「るーたん久しぶり～。リンはどこー？」

「あー、今日リン先生はお休みだよ」

「えっ、なんでなんでー？」

「さぁ、理由教えてくれなかった」

それだけ言うと、その女子はまた練習に戻っていった。天井からつるされた黒い筒状のものを、目にも留まらぬ速さで回り蹴る。片足を軸にして回り、そこから一瞬だけ両足を床から離して、軸と反対側の足で蹴るのだ。テコンドーで言うところのタンチャギというものだったか。タンチャギとやらを繰り出した直後に、その足が地に着く前にもう片方の足を繰り出す。

ティンクはその練習を気にすることもなく、道場を後にした。彼女にとって、リンのいない道場は、ただの暑苦しいサウナなのであ

る。
「マゼンダ怒ってるだろうなー。ほんとにわたしじゃないのに」
テンミリ探偵事務所に着くと、案の定マゼンダはかんかんに怒っていた。激怒していた。まだ白い皿を大事そうに、まるで証拠品を扱うように持っている。いや、証拠品だとしたら、素手で持ってしまっていてはいけないのだが。
「お、か、え、り。ティンク」
マゼンダは全速力でダッシュしたあとのように息を切らせている。
「いくらリンが庇ってもねぇ、あんたが犯人だってことは分かって――」
「リン、いなかった」
「あら、そうなの」
鎌のように持っていた皿を、マゼンダは下ろす。
「リン、理由を言わずに道場休んだんだって」
「なにっ！？」
ふいにブロントがソファーから飛び起きた。布団代わりのコートが舞い落ちる。
「ふむふむ。事件の香りがグッドテイストなんじゃないか？」
「最近のリンに、なにか変わったところはあった？」
マゼンダがティンクに訊く。探偵らしい顔になってきた。
「ううん。最近は会ってなかったの」
ティンクが答える。薄緑の髪が、一層薄くなっているようだ。
「よし！　ブルースんとこ行ってくる！」
ブロントがそう言って探偵事務所を出ていった。
「なるほど。リンの夫なら、リンについて知っているでしょうね」
籠の黒猫が、また安眠を妨害されたとでも言うように、じとっとした視線を送っていた。
それを無視して、マゼンダとティンクが、また喧嘩を始めた。主にシュークリームについて。

第八幕

「それはな……単にテミちゃんのことを心配しているだけなんだぜ？　いくら腹違いとはいえ、クロウはテミちゃんのおにーちゃんなんだ。ちょっとは神経質にもなるさ。かわいい妹のことだからな」
「でも……」
「でも、じゃあない。そりゃあ確かにクロウの野郎は、神経質になりすぎているかもしんねぇ。シスコンだって……ああいや、なんでもない。だがクロウのそんな行動は、テミちゃんにとっては鬱陶しくて辛いことであっても、全部きみのためにやってることなんだぜ？　テミちゃん」
　広間のベンチでふたりは会話していた。地上十メートルから落ちても怪我ひとつしなかったジルバと、自分の兄と顔を合わせたくなくて広間で時間を潰しているテミのふたりである。
「でも羨ましいよ。そうやって悩める余裕があるってさ。俺なんか、毎日働きづめて、やっとどうにか生活できるだけの金をもらって、ただそれだけだもんな」
「ジルバさんには……悩みはないんですか？」
「あるよ。ただ、それをどうにかする時間がないんだ。……いや、時間そのものはあるのかな。ただ俺が目を背けているだけで」
　ジルバは上を見上げる。両腕を肘のあたりで、ベンチの背もたれに置いて。
　テミはジルバと会話しているうちに、だんだんと小さくなっていった。両手を膝に置く。
「このビルには……自然がありません。この芝生も、あの木も、この広間が綺麗な円形になっていることだって、ぜんぶ人間が作ったものです」
「テミちゃんは……それが嫌なのか？」
「ええ、イヤです。首が絞められます。息苦しくなります」

ふーん、とジルバは無責任な相槌を打つ。この状況を楽しんでいるという風でも、面倒臭がっているという風でもなかった。ただジルバは、後輩の相談に乗ってあげているだけのようだ。深く関わったりしない、そう自分に言い聞かせてでもいるように。

「だったら……テミちゃん、上を見上げてごらんよ」

「上？」

テミは斜め上を見上げた。彼女の視界に映るのは、規則的なビルと、カーテンで閉められた窓だけだった。

「違う違う。真上を見るんだ。首が痛くなるくらい、真っ直ぐ上をね」

テミは言われるがまま、顔を真上に向けてみた。いつも下ばっかり向いていたからか、少し筋肉が強張ったようで、膝に置いていた左手を首に送る。その途中、その手がジルバの右腕に当たった。

会話の間、ジルバがずっと眺めていた世界。

「うわあ」

テミはつい感嘆を上げた。

「これが、空だよ。ビルがどんなに高くたって、まだまだ届いてねぇ空だ」

広間の形と同じ、円形の空。ビルに囲まれたせいで、広間から真っ直ぐ上を見ないと見ることができない。だがそこには風の動きがあった。雲が、動いていた。

「ジルバさん！」

「……なんだ」

テミの瞳は、磨かれた宝石のように煌びやかに輝きだしていた。

「屋上に行きましょう。わたし――空が見たいです」

第九幕

コール音が鳴った。
「……どなたですか」
気だるそうな声が部屋から聞こえた。ブロントは「俺、俺俺」と一昔前の詐欺師を装う。
「ブロントか。入りなよ」
ドアノブに付いているランプが、赤色から緑色に変わった。それと同時に、重たいドアが開く。開いたドアから、青い髪をした男、ブルースが顔を覗かせた。
質素な家だった。たったの一部屋と、シャワールームとトイレしかない家だ。その一部屋には、ベッドとクローゼットと、本棚しかない。本棚には数冊の本しかなく、下から二段目はまるで机代わりに使われてでもいるように、ノートパソコンが置かれている。おそらく、ブルースはこのパソコンで仕事をしているのだろう。
「リンになにか、変わったことはないか」
入ってきて早々、ブロントはブルースにそう訊いた。
ブルースは「まあ座りなよ」とブロントを促す。
「なんにもないところだな。食事とか、どうしてるんだ？」
「質問はひとつずつだ」
ブルースはベッドに腰掛ける。ブロントもどこかに座ろうと思ったが、ベッドを除けば座るところは床しかなかったので、そのまま立って話をすることにした。
「リンに変わったところ……常に常人離れしていることを除けば、特にないのだが」
「そうか。じゃあ、今日どういった理由で道場を休んでるんだ？」
「……。今日もいつものように、リンは道場へ向かったはずだぞ」
ブルースは少し驚いたようにそう言う。その表情に偽りはなかった。

「そうか。なるほどな」
「……まあ、いい。それで、用件はそれだけなのか？」
「『いい』ってなんだよ」
「疑っても意味がない。今日帰ってきたら、自分から訊くさ」
ブルースはベッドに深く腰を落ち着かせて言う。
「リンのことを、力量の面でも性格の面でも、心から信頼しているからね」
ブロントは旧友の変わった姿に、口を開けて驚く。
「まさか……人間不信だったお前が、ここまで変わるとはな」
ブロントの言葉を聞いて、ブルースは冷静な笑みを見せた。少し照れている風でもある。今のブルースの青い髪には、寝癖がない。魔王討伐隊として冒険に出ていたころは、毎日のように、チャームポイントのように癖毛を作っていたというのに。
「ブロント。まだ、魔王を信じているか？」
ふいにブルースがそう訊いた。手を組んでいた。
「魔王……。ブルース、その話は終わったはずだ」
「俺たちはあの城を燃やした夜、奇妙な白い光に包まれた。覚えているよな」
ブロントが戸惑いつつもこくりと頷くと、ブルースは気だるそうに、されど恍惚と語り始めた。
「あの光に包まれてから、俺たち十人は魔法が使えるようになった。これまでの科学が頑なに否定してきた、魔法だ。クロウは他の生物に変化できるようになり、マゼンダは何もないところから火を起こすことができるようになり、ミドリは人の心を読めるようになった。
今朝、あの城の夢を見たんだ。俺が銅の剣を握っていて、弓の弦に首を絞められていて、毛虫に埋もれていって、過去の自分に殺される夢だ。とてもリアルな夢だった。まるで誰かが、魔王のような架空の誰かが、俺に何かを伝えてきているようだった。
なぁ……なんで俺たちは魔法が使えるというのに、社会はそれを否定し続けるんだ？　どうして俺たちを、精神障害者として扱った

んだ？　なあ」
坂を滑り降りたようにそう一気に言うと、一旦言葉を瞑ってブルースは下を向いた。
沈黙が続いた。ベッドの隅のほうで横たえている目覚まし時計は、朝の九時を知らせていた。
ブロントは部屋を見回していた。カーテンは閉めきっている。ここに限らず、最近はどこの家もそうだ。
「あの城へ行け、ブロント」
ふいに、ブルースが低い声でそう言った。突然の沈黙破りに、ブロントは驚いてベッドのほうを向きなおす。ブルースは顔を上げていた。ブロントと目が合うと、もっと顔を上げる。
「そして待て。何時間も」
ブルースは天井を見つめていた。光の届かない部屋の天井を。
「たぶん……魔王に会えると思う」

第一〇幕

この店のドアが開くと、それに付いている鈴が鳴る。乾いた音が店内に響いた。

「いらっしゃい」

ミドリは反射的にそう言う。カウンターに肘をついて、接客にしてはいささか不真面目である。

「おや……キミ」

朝の9時からバーにきた客は、ミドリと同世代の黒髪女性だった。黒髪といっては語弊が生まれてしまうような、艶やかな、光沢のある黒髪である。それが足元にまで伸びていた。端麗な顔は、雪よりも白い。

「カシス・オレンジ」

「はいよ」

大型のグラスに深紅のリキュールと氷を入れる。そこにまた、オレンジジュースを入れて、少しだけステアをしたら、カシス・オレンジの出来上がりだ。

「お待たせ……朝凪さん」

「ありがとう」

その客は、自分の名前を言い当てられたことに驚かなかった。初めての客であるはずなのに、この反応は不思議だと、ミドリは笑う。そしてまた相手の心を見た。

「初めて、だよね。カクテル」

「うん」

「この店、値段高いから飲みすぎは気をつけてね」

「うん」

他に客はいなかった。

第二一幕

テミは空を見上げていた。空気調節器の範囲外、ビルの屋上からである。

空の躍動あふれる流れに、テミは完全に心を奪われていた。今にも、空に浮かび上がってしまいそうである。舞い上がってしまいそうである。

「おいおい。風に飛ばされるなよ」

ジルバはそう快活に言った。開放されたこの空間にいることで、自然とジルバも上機嫌になっているようだ。

「すごいです。ジルバさん、こんな空気を感じて仕事していらしたのですね」

「ははっ。低賃金だけどな」

ここでなら、首を痛めることなく空を眺めることができる。飄々と、雲が走っていた。

「みんなを、ここに連れてきてあげたいです」

「うん？」

テミがそっと呟いた。聞こえなかったのか、ジルバは聞き返す。強い風が吹いた。テミの金髪が勢いよく靡く。

「みんな、もやもやとしたわだかまりの中で生きているんです。ビルの中で生活用品は全て揃いますし、ビルの中でスポーツだってできます。ビルから出ることなんて、選挙のとき役所へ投票しに行くくらいで、その演説とかだって、全部ネット中継ですし……」

「リン」

ジルバが言う。相談ならなんでも来い！　とでも言うような先輩の風格を装って。

「ここに来る途中、リンを見かけたろ。保育室をガラス越しに、うっとりした表情で眺めていた。俺はあれを、そうネガティブなものには見えなかったけどな。むしろ、希望溢れていた」

風が舞う。屋上ならではの感覚。
「……ジルバさん。うちの事務所で働きませんか？」
テミはそんな言葉を、風に載せた。便箋のように、その言葉はジルバに届く。
「いいや。遠慮しとくよ」
風はテミの髪だけでなく、ジルバのぼさぼさ頭も掻き乱す。
「俺は――このビルの清掃員だから」

第一二幕

「うん」

数回目の「うん」を、朝凪は口にした。律儀に頷くのも、これまでの二時間となんら変わりのないアクションである。

異質な雰囲気である。朝の酒屋で、バーテンダーと客がふたりだけで、バーテンダーが話しかけても「うん」としか客は言わない。

この、沈黙とも言い難い静寂を押し破ったのは、新たな客だった。

からんからんと、鈴が鳴る。

店に入ってきたのは黒猫だった。赤と青のオッドアイ、堂々と尻尾を掲げている。

「いらっしゃい」

「ミルク」

「はいはい」

黒猫はもちまえの跳躍力でカウンターに乗る。この店のドアも、ドアノブにジャンプして捻ったということがうかがえる。それとほぼ同時に、ミルクの入った底の深い皿がカウンターに置かれる。

「……早いな」

「クロウの気持ちが、ぶんぶんと届いていたからね。先に用意してたのさ」

ぺろぺろ、ミルクを舐める。人間でいるときよりも黒猫でいるときのほうが長いと、食生活にも変化が表れてくるようだ。

「猫が喋っても、キミは驚かないんだね」

「うん」

朝凪は規則正しく頷く。すると、彼女の目の前のグラスが、黒猫によって倒れた。グラスには何も入っていないので、何かが零れるということはなかったが。

「こいつ……二週間前から行方不明になっていた朝凪じゃないか」

そのとき、ドアが破れた。

透明の槍で突かれでもしたのか、店のドアが、中心から放射状に割れる。そして崩れる。
崩れたドアの先には、足元にまで伸びる白い髪が特徴的な、男が立っていた。右手を大きく開いて、木片と化したドアに向けている。ぎろりとした目つきで、朝凪を視界にとらえる。
「見つけた……！」
男はそう言い放つと、即座に朝凪の前方にいた黒猫に右手を向ける。その右手の平から、見えないものが飛び出てきた。見えない速度で、それは黒猫に襲い掛かる。
「うわっ」
黒猫は吹き飛ばされた。後ろにいたミドリが辛うじて受け止める。
「ルファ！」
ミドリが男の名前を叫ぶ。だが既に男はいなかった。そして朝凪という女も、消えていた。

第一三幕

ビルの外に出ると、そこに見えるのは役所や刑務所などしかない過疎状態の町である。その町を出て行くと、誰も手をつけない、自然のままの森がある。

ルファという男は、その森を歩いていた。生い茂った草木を手刀で切り倒し、歩きやすいよう道を作る。彼の後ろを、無表情に徹した朝凪が歩いていた。

火に炙られでもしたのか、焦げた木があった。ルファは気付かずにそれを切り倒す。

しばらく歩くと開けた場所があった。ビルの広間のように、森に囲まれた草原。そこには燃え尽きた城の残骸があった。瓦礫に蜘蛛の巣が張られていた。人工物では出せない香りが漂う。

「よお、ルファ」

まるで待っていたように、そこには金髪の男と、赤い髪の女が立っていた。二人とも、焦げ茶色のコートを羽織っていた。赤い髪をしたマゼンダは、自分の髪と同じ色の本を抱えている。

「ははっ……。その年になってペアルックか。昔の戦士服と魔道服のほうが、よっぽどお似合いであったろうに」

ルファが肩を震わせる。連動して白い髪も揺れる。この状況を嘲笑っているように。

「残念だけど、今は戦士じゃなくて探偵なのでね」

「まさか、ここで私の邪魔をしようというわけではないだろうな」

「訊くまでもないこと訊くなよ」

ルファが右手を刀の形にして、自分の左肩のあたりまで一気に空気を切った。超音速の刀が、衝撃波を生み出す。空気のせめぎあい。ふたりは咄嗟に跳び避ける。瓦礫が崩れた。割れたガラスを踏みつけて粉々にするように。

「3ヶ月ほど前から、毎晩同じ夢を見ていた」

変な形に曲がった右手の指を見つめながら、ルファは言う。
「毎晩、自分が死ぬ夢を見ていた」
無理矢理指を捻じ曲げ、堅く拳を作る。そしてルファはその拳で、思い切り地面を殴った。
地面が盛り上がる。マグマが弾けてしまったような、爆音。地響き。
「だが夢は不変ではなかった。二週間前、十月十四日に、夢にやっとこの女が出てきたのだ」
ルファは朝凪に視線を送る。朝凪はどこを見るという風でもなく前を見ていた。
「そして気付いた――この女こそが、魔王だったのだと」
マゼンダが本を開いて呪文を唱えた。マゼンダとブロントに飛んでくる地面の欠片を、空中で燃やして灰にする。
「私は朝凪をここへ連れていこうとした。夢のように魔王をこの城に連れてくれれば、きっと何かが起こると信じていた。だが魔王は既に八〇二号室から姿を消していた」
ルファの右手は血まみれになっていた。
「光に包まれたとき、私はこの右手を手にした。あらゆるものに代用できる右手だ。空気砲に、ナイフに、ハンマーにだってできる。これを魔法と呼ばずになんと呼べる？　幻だと思われていた魔王は、本当はいた」
ルファがぴん、と真っ直ぐ右腕を伸ばした。肩のあたりから、気持ち悪いほど真っ直ぐな線ができる。剣の代用だ。
太陽がぎらぎらと光を注いでいた。

第一四幕

ルファが右腕を振り上げた。マゼンダの頭上に振り下ろす。ブロントが間一髪でマゼンダを突き飛ばす。右腕が瓦礫を砕く。その隙にマゼンダが呪文を唱える。ルファの白い髪に火がつく。火が大きくなる前に、ルファは自分で髪を切った。

とたんにブロントが後ろからタックルをきめる。ルファは姿勢を崩しながらも体の向きを変え、右腕をタックルの威力に乗せる。指先がブロントの頬を切った。顔に血の波模様ができる。痛みに判断を任せて、ブロントが咄嗟にルファの右腕を掴む。だがそれは、剣の刃を握るということと同じことだ。ブロントの手が椿の花のように紅く潰れる。地に落ちた小指。紅く染まった腕。

そのまま、ブロントがルファの上に乗る形でふたりは倒れる。ふたりの間にルファの右腕が挟まっている形になり、ふたりの腹が圧力に負けて抉れた。その痛みに気付いて、ルファは腕をただの腕に戻す。ルファとブロントの腹が紅く染みる。ふたりは抱き合うように地面に横たえていた。

「これでいい。データは揃った」

氷よりも冷たい声が、ふいに響いた。それは朝凪の声だった。

いつの間にか、マゼンダの、呪文を発動するための本は、朝凪の手に渡っていた。マゼンダは金縛りにあったように、見えない糸で地面に縫い付けられでもしたように、目を閉じて動かない。

朝凪が高くその本を掲げる。惜しげもなく太陽の光に晒され、そして、燃えた。まるでマゼンダの魔法のように、何もないところから火が生まれ、本は灰になった。

てくてくと、真っ白の肌を持つ女性がルファとブロントのところへ来る。ブロントはどうにかルファの上から起き上がった。ルファも続けて起き上がる。

「これは……。これが……ついに、魔王の力が」

ルファが腹を手で押さえながら、途切れ途切れに言う。
「残念だが、私は魔王ではない」
そう言うと朝凪は自分の右手を刀の形にし、勢いよくそれをルファの右肩に沿わせた。ぼろりと、右腕は落ちた。数秒遅れて、空のように大きな叫び声が響く。
「お前たちは思ったはずだ。『なぜ社会が魔法の存在を否定するのか、自分たちの能力を肯定しないのか』と」
朝凪は雄弁な哲学者のように、口を動かさずにそう言う。脳に直接語りかけているのだ。ミドリが脳から直接聞いてくるのと似ている。
「それは、そもそもそれが魔法ではないからだ。魔法ではなく、現代科学の産物であるからだ」
饒舌。それに反して、朝凪の顔は何も語っていない。
生生しい匂いがブロントの鼻を曲げる。ルファは立ったまま気絶していた。つん、と、朝凪がルファの胸をつつく。案山子のようにルファは倒れる。数分前のルファの攻撃で出来た、地面から突き出た石が、ちょうど倒れてきたルファの背中を貫く。
「お前たちは、最新科学の実験体だったのだ」
朝凪は、呆然と立ち尽くしているブロントの首に人差し指と中指を添える。
「心拍数１４２」
そして、やっと朝凪は笑った。不気味な笑い。鎌を持った死神のようだ。
だが、その微笑はすぐに消えた。消えただけではない。だんだん朝凪の顔は蒼白になっていった。いつもの白さではなく、恐怖を目の当たりにしたときの蒼白さだ。
気付けば朝凪は、銅の剣を握っていた。柄のほうではなく、刃のほうを。顔を挟むように弓の弦に絞めつけられていた。そして足元から、大量の毛虫が湧き上がってきていた。
「私も――実験体？」

「そう。理解が早いじゃないか。これは十体の実験体に仕組まれた、いわゆる削除機能さ」
ぽんぽんと、ブロントが朝凪の頭を撫でる。頭を挟む弓が振動して、もっと深く弦がめり込む。
「おかしいと思わなかったのか？　俺が魔法を使わなかったこと」
にたにたとブロントは笑う。
「誰も気付かないんだよな。俺が魔法を使えないことに――俺が役所の遣いだってことに」
朝凪の首が弦の圧力に負けた。あっけなく首のない胴体は倒れ、ボールのような首は転がっていく。ボールにしては、長い髪がいささか邪魔だが。群がる毛虫が、その死肉を平らげていった。
ブロントは気絶しているマゼンダとルファを抱えて、町へ戻る。

第一五幕（最終幕）

「いや～、テミの治癒魔法はすっげぇなぁ！　マゼンダもルファも俺も、もう傷ひとつないぜ」
ブロントがそう快活に言った。
「クロウも、褒めてやれよ。かわいい妹の大活躍だぜ？」
「……まあ、よくできたかもな」
そっぽを向きながら、人間姿のクロウは言う。
「はいはい出前ですよー」
ドアの外からそう声がした。ミドリの声だ。
「はいはいー」
テミが出る。
「あれ、テミぃ。なんか嬉しいことでもあった？」
テンミリ探偵事務所に入るなり、ミドリはそう言ってのけた。全てを知ってでもいるように、にやにやと。
「ケーキケーキ！」
ティンクが小学生のように跳ね回る。ミドリの店に注文したのは、大きなバースデーケーキだった。
「事件の解決祝いにケーキはいいんですけど、なんで誕生日ケーキなんですか？」
「細かいことはいいんだよ。まあ、いきなりそんな注文されて、準備してなかったせいなんだけどね」
ミドリは笑う。テミも笑う。ブロントはいつものように快活に笑い、マゼンダだけは不機嫌そうな顔をしていた。
「結局あたしのシュークリーム、誰が食べたんだろう……」
「そんなのブロントに決まってるじゃない。心を読めば一発さ」
ミドリがそう言う。ブロントは驚いたように、訊き返した。
「俺の心だけは読めないんじゃなかったのか？　昔、そう聞いたはずだが」

「あれは嘘さ。もう隠さないことにしたんだよ。……それでも、ブロントが仲間なのは変わらないんだから」
「……そうか」
ブロントは安心したように笑い、ミドリは心配のないように笑った。
「うん？　なんの話？」
ふたりを見て、マゼンダが分からないという風に腕を組む。
「早く食べようよ！」
ティンクが急かす。猿のお人形さんみたいに、手を叩きながら。
「……まあいいわ。こんなケーキを前にして、シュークリームひとつで怒ってられないし」
「お、マゼンダ成長したじゃん」
ミドリがからかうように笑う。
「ルファさんもすぐ帰らずここに残ればよかったのに」
テミがそう呟きながら、天井を見上げた。
「今度、星を見にいきましょう」
テミの思考を先取りして、ミドリが言う。
十月二十八日の夜は、笑顔に包まれていた。

＊　＊　＊　＊　＊

「ただいま」
リンが帰宅した。明るい部屋で、ひとりパソコンをいじっていたブルースが出迎える。
「おかえり、リン」
ブルースを見るとリンは、すぐさま彼を抱きしめた。
「今日、病院に行ってきたんだ」
ブルースの胸に顔をうずめて、リンは踊るような声で言う。

「二ヶ月だってさ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9801x/

てんたん！

2011年10月28日15時10分発行